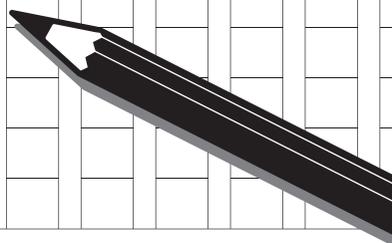


令和4年度

第8回 藤原正彦

エッセイコンクール



入賞作品集



姫路文学館

姫路文学館では、エッセイストとしても人気の高い藤原正彦姫路文学館長（数学者・作家・お茶の水女子大学名誉教授）が「読書」とともに推奨する「書くこと」の大切さを伝えるため、平成二十七年六月に「藤原正彦エッセイコンクール」を創設しました。

本賞は、中学生以上を対象とし、藤原館長の審査により、中学生部門、高校生部門、一般部門の各部門につき最優秀賞、優秀賞、佳作各一作を選考するものです。

第八回目を迎えた今回は、全国から一九二八点の力作が寄せられました。

〈生きることは創ること〉——藤原正彦館長の言葉です。

何気ない日常、出会った人や書物、あるいは孤独や沈黙も、心のどこかに宿り自分自身をつくり続けているはずです。

このコンクールを通して、多くの方々が、自分を見つめ、考え、文章にする機会を持たれましたら幸いです。

目次

■中学生部門

最優秀賞 「ウソ」

兵庫県 姫路市立琴陵中学校

一年 藤澤 幸示 …… 4

優秀賞 「忘れられないありがとう」

兵庫県 小林聖心女子学院中学校

三年 吉武 歩花 …… 7

佳作 「四万十川の魔法」

兵庫県 姫路市立広畑中学校

二年 虎島 佑奈 …… 11

■高校生部門

最優秀賞 「二枚目の貸出券」

兵庫県 小林聖心女子学院高等学校

三年 白羽 佑果 …… 14

優秀賞 「家族の歴史」

兵庫県立加古川東高等学校

二年 藤原あかり …… 18

佳作 「あの日と目が合った」

東京都 N H K 学園高等学校

二年 前田 乃愛 …… 22

■一般部門

最優秀賞 「味噌蔵の魔法使い」

群馬県 前橋市 (パート)

高山恵利子 …… 25

優秀賞 「あのね」

北海道 旭川市 (外部調査員)

柴田えみ子 …… 29

佳作 「外国のノート」

兵庫県 淡路市 (日本語教師)

鍋島 えり …… 33

■概要

……… 37

第八回 藤原正彦エッセイコンクール 入賞作品集

中学生部門

最優秀賞

兵庫県 姫路市立琴陵中学校 一年

ウソ

藤澤 幸示

僕は、よくウソをつく。ウソを「つきたい。」と思ったことは、一度もないのにウソをつく。例えば、夏休みの宿題。「今日こそちゃんとやっつく。」と母に言う。この時の気持ちにうそはない。本気でそう思う。しかし、母が仕事に行くと、ゆっくり朝飯を食べて、テレビを見始める。時計を見るともう12時。お昼ごはんを作り、食べ終わると1時。またテレビを見る。あつという間に時間が経つ。夕方、玄関のドアが開く音が聞こえる。ものすごくあせる。何もしてない。ぼくの朝の話はウソになった。

その後も、母が夜ご飯を作っているとき、リビングで一人ゴロゴロしていると、「何してるん？」と母の声が聞こえてくる。ゴロゴロしてテレビを見ているのに「宿題してる」と言っつて、またウソをついてしまう。

それから、のどが乾いて、水を飲もうとコップに入れる。こぼしてしまって床がぬれる。ふかないといけないが、「また後でふけばいいかな。」と思い、そのまま放置する。と家族の誰かが気づき、「誰か水こぼした？」と言われても、「こぼした。」と言わずに「こぼし

てない。」と言ってしまふ。また、ウソをついてしまふ。

小学生のときには、遠くの公園まで遊びに行つてはいけない約束があつたのに、行つたことが何度もある。ゲームのアプリを勝手に入手したこともある。公文の宿題プリントをタンスの中に隠して、「全部できた」と言つたこともある。

このほかにも、父や母を裏切つたウソはたくさんある。

そして、こんなウソはなぜかバレる。

この間、家にあつた一冊の本が目にとまつた。谷川俊太郎「うそ」という絵本だ。

その本の中の『いつていることは うそでも うそをつく きもちはほんとうなんだ』というところにとても共感した。最初に挙げた夏休みの宿題の出来事にもあつたように、「今日こそ宿題をちゃんとやつておく。」という気持ちは、本当の気持ちだ。

それから、『ぼくは うそといっしょに いきていく』というところにも共感ができた。やっぱり人生は、ウソをつかずに生きてはいけないと思う。大人もきつと、いっばいウソをついているはずだ。やっぱり、何かしらウソをつくのが人間だと思ふ。だから僕はウソといっしょに生きていかないとはいけないと思つた。ウソで誰かを救ふこともあると思ふ。でも、他人を傷つけるウソをつくことは、絶対いけないと思ふし、そんなことはしたくない。絵本の最後の文『いつも ほんとに あこがれながら ぼくは なんども なんども

うそをつくだろう』というところが印象に残った。考えて見ると、ウソと本当は反対の言葉だからこそ、本当にあこがれるのだと思う。

これから、僕は絶対ウソはつかない！

これは、ウソです。

でも、絶対に、自分にはウソはつかずに生きていきたい。

中学生部門

優秀賞

兵庫県 小林聖心女子学院中学校 三年

忘れられないありがとう

吉武 歩花

夏休みの課題「職業インタビューシート」についてお母さんに聞いてみた。

「ねえ、昔、販売の仕事をやっていたよね。販売の仕事って大変だった？」

私は昔からレジ打ちに憧れていたもので、何となくレジって大変なのかな、それくらいの気持ちで聞いてみた。するとお母さんは

「立ち仕事だし、販売以外の仕事も沢山あるから本当に大変な仕事だよ。だけど、色々な人と関わる分幸せな経験もいっぱい出来たから本当に素晴らしい仕事だったな、と思ってるよ。」

私は思いがけない返答に驚いた。

物を買う側は幸せな気分になれるかもしれないけれど、売る側が幸せだと思える出来事って何だろう？そこでお母さんに質問を試してみた。するとお母さんが答えてくれた。

「数えきれないほどの人を接客してきて、沢山の「ありがとう」の言葉をもらったけれど一人だけどうしても忘れられない「ありがとう」の言葉をくれたお客様がいたんだよ。」

私はさらにお母さんの話には耳を傾けた。

すると、目を真っ赤に腫らして来店をしたお客様の話をしてくれた。実はその人はもう何年も子供が欲しくてずっと不妊治療をしている人だった。それでもなかなか子供を授かれないから思い切って治療を辞める決断をしてきたところだったのだ。そしてその人が言った。

「思い切って今まで頑張ってきた自分へのご褒美に何か買おうと思っただけで来店しました。」
お母さんは一体どんな物を勧めたのだろうか？ドキドキしながら聞いてみた。

なんとスニーカーを勧めたらしい。私はどうしてスニーカー？ととても不思議な気持ちになった。

お母さんは、そのお客様が本当の意味で子供を諦めた訳ではないと感じ、あえてオシャレなスニーカーをお勧めしようだ。その時そのお客様が言った。

「思いきって高額な靴でも買おう、と思っただけだからスニーカーは全く頭になかったわ。だけど、こんな素敵なスニーカーを履いてベビーカーをおしたり公園で遊んでいるママって素敵だね。これにします。」

そう言って満面の笑みをうかべて購入してくれたそうだ。

するとそれから数カ月後にそのお客様が再び来店した。

「実は妊娠したんです！あの後、スニーカーを眺めながらママになる日を想像して、夢みて過ごしていたら自然に妊娠する事が出来ました。あのスニーカーを勧められて本当にありがとうございます！幸運のスニーカーです。」

と喜びの報告をする為にわざわざ店に来てくれたそうだ。

その後も赤ちゃんが生まれる前に遊びに来てくれたり、生まれた赤ちゃんを連れて何度も遊びに来てくれたらしい。

私はお母さんが働いていた頃の話あまり聞いたことがなかったので、そんな感動的なエピソードがあつた事にとっても驚いた。

販売する人は、物を売ることだけが仕事だと思っていた。なので、一人一人のお客様との会話の中で色んなドラマが生まれている事に衝撃を受けた。

人を助ける仕事と聞いて、販売の仕事を思い浮かべる人はあまりいないと思うけれど、職種、業種に関係なく人の心を助ける仕事はとても幅広いことに気がついた。

私はまだ将来どんな仕事につくかわからないが、どんな仕事についていたとしても、人を大切に、人の心を大切に感じながら仕事をしたいと強く思った。これから私にはどんなドラ

マが待ちうけているのだろうか？この先の人生が楽しみでワクワクする話が聞けて私も幸せな気持ちになった。

中学生部門

佳作

四万十川の魔法

兵庫県 姫路市立広畑中学校 二年

虎島 佑奈

中二の夏休み。来年は受験生で忙しいだろうから、今年は家族旅行を楽しもう！と父が提案。

「えー・・・」

中二だからといっても、やらないといけない課題はたくさんあるし、決して遊びまくれる夏休みではないのだ。長い夏休み期間のうちたった四日間と思うかもしれないが、勉強もせずに遊んでいてもいいのだろうか？課題も終わっていないから罪悪感もあった。

でも家族で思い出を作りたいと考えて計画してくれた父のためにも、嫌々ながら行く事を決めた。

行き先は四国。高知の四万十川では父が勝手にラフティングの予約をしていた。弟や妹は嬉しそうだったが

「保育園児の弟みたいにな、川遊びではしゃげるほど、私は子供じゃないしー。」
最初はそんなふうに思っていた。

ヘルメットとライフジャケットを身につけてかばんもスマホも持たず、ペットボトル一本だけ持ってボートにのりこむ。ボートをこいだり、遊泳スポットではプカプカ浮かんだり。

二時間ほどの川下り。四万十のおおくてきれいな水に浮かびながら、美しい山や景色を眺めていると、勉強の事とか友達の話、将来の不安など、いろんなモヤモヤも川に流れていったのか、頭がさえる。心も体も軽くなるような感覚だ。流水音は、いつも聞いている音楽よりも心地良い、自然のBGM。

時間の感覚もなくなつて、私は四万十川と一体になった。

川の流れが早い場所では、ボートも大きくゆれるし、しぶきも大きい。リアルなスプラッシュマウンテン。しっかり踏ん張っていないと、ボートから落ちそうになる。遊園地よりもこわい。それでも

「キヤーツ！」

と大声を出しながら、自然と笑顔になってしまう。

水深が十メートル以上ある深い場所もあれば、岩や小石がごろごろしていてボートが引つかかるくらいの浅瀬もある。流れの弱い所はがんばってオールをこがないと前に進まない。一本の川なのに深い所や浅い所、流れが早い所、ゆるやかな所。岩や釣り人など、

行くてをはばむもの。いろんな場面が次々にやってくる。ボートが進む方向を考えてこがなければならぬから頭も使う。複雑ではないはずの川なのに、簡単には進めない。

ガイドさんが最初に教えてくれた。

「急な流れがきても、その後は流れが穏やかになりますから心配しないでね。」

本当にその通りだった。ボートに乗りながら、私は川下りは人生と同じだと感じた。良い事も楽しい事も、嫌な事もつまらないと思う事も、きつとずつとは続かない。気分は上がったりがつたりを繰り返すんだ。

川遊びだなんて……。最初は気が乗らなかつたのに、いつの間にか楽しんでる自分がいた。すべてがリセットされた。これが四万十川の魔法なのか？嫌だな、と思う事でも、実際にやってみたら、楽しかったり、やって良かったと思えたんだから、迷っている事でもチャレンジしてみようかな？そんな気持ちにさせてくれた四万十川ってすごい。

これからも私は、いろんな問題にぶつかつたり、悩んだりするだろう。でも良い事も悪い事も、ずつとは続かないはずだから、と自分を励ましながら生きていくと思う。どうしても辛くて苦しい時、四万十の美しい景色を思い出し、魔法にかかりに再び訪れたいと思う。

高校生部門

最優秀賞

兵庫県 小林聖心女子学院高等学校 三年

二枚目の貸出券

白羽 佑果

高校三年の七月、小さいころの持ち物を整理していたら、小学生当時の財布から、「しらはゆうか」と親の字で書かれた市立図書館の貸出券が見つかった。かねてから読書の時間をとりたいたと思っていた矢先のことだった。

近頃はまともに本を読まなくなったが、小学生時点ではまだ活字の虫だったと記憶する。——生徒でゴった返した夏休み前の図書室。それまでどこに隠れていたか分からない小説や理科の実験の本なんか、受付横の棚にずらりと並ぶのが毎年楽しみだった。楽しみといえば、自宅から歩いてすぐの市立図書館に通い詰めた日々も思い出深い。館内を歩いて何十万という蔵書からビビッとくる背表紙を見つけ出し、それを携えて受付に向かうときは、さながら秘宝を手にしたトレジャーハンターの気分だった。図書館はいつも、新たな本に出会う喜びにあふれていた。

しかし学年が上がるにつれ、読書に使う時間は減る一方だ。小さいころと同じ二十四時間ですべて生きているはずが、どんどん時間が惜しくなる。高校生になると図書室にはもうほと

んど立ち寄らず、ましてわざわざ足を運ぶ必要がある市立図書館なんてなおさら。本が読みたくとも、今はその余裕がない。そうやって読書を後回しにしていたら、最近は自分が何の本を読みたかったかさえ見失う始末。ごめんね、小学生の私。あなたの高校生活は現代文の教科書だけで終わりそうです。

そんなのだめ！ と、貸出券が叫んでいる気がした。とうの昔に失くしたと思っていた、ひらがな書きの「わたし」が。

早くわたしをもって図書かんに行って！

ずっと、読書はまた「いつか」と思ってきた。が、気づいた。その「いつか」は、自分で作らないかぎり訪れない。よし、決めた。行こう。あの市立図書館に。

ただ読書から離れて久しい私には、広大な図書館で自分の読みたい本を見つけ出す自信がない。そこで、今回は借りる本をQ&Aサイトで誰かにすすめてもらうことにした。現実の知己に尋ねるのもいいが、経験上、こういうときにネットを使うと面白い。ネット上では多くの人がおのおの好きなものを追うのに夢中で、さらにそれを他人に薦めるとなると目の色を変える。それを信頼して、というのもおかしく聞こえるかもしれないが、そんな彼らに「オススメの本を教えてください」と質問すれば、きっと喜び勇んで作品を推しにきてくれるはずだ。

ワクワクしていると、さっそくアカウントのアイコンにバッジがついた。新着回答一件。へ一生この沼から抜け出せないんだけど、これ見た誰かがうっかり読んで同じ目に遭わねえかな〜

ほらきた。この勢いが見たかったんだ。一生という過剰ぎみな表現、作品の深みにはまることを沼と書き表す語彙のセンス、そして文末の記号の重複。紛うことなきオタク構文。是が非でも誰かを同じ「沼」に引き入れたいことの表れか、彼らの文章はしばしばモノの内容そっちのけで、溢れんばかりの感情に比重を置いて構成される。書店の推薦文などとは真逆の、本の紹介なのに自分むき出しの語り口が私は妙に好きだった。本好きの彼らも一緒になって、私の背中を図書館へグイグイ押ししてくれる気がした。

さて二日後。私は炎陽の下、気分上々うん年ぶりに図書館の門をくぐった。借りることになったのは、いずれも読んだことのないアーサー・C・クラーク『二〇〇一年宇宙の旅』、長野まゆみ『カルトローレ』、青崎有吾『アンデッドガール・マーダーファルス』の三冊。これらを探して館内を練り歩き、その背表紙を見つけては本棚から引き抜いていく。と、たちまち懐かしい喜びが込み上げた。ここに来なければ忘れるところだった。新たな本に出会うことが、こんなに心を躍らせるものだったなんて。ありがとう、貸出券。ありがとう、小学生の私。あなたのおかげで私の生活に本が戻ってきました。

足り軽く受付にもどる。司書さんに例の貸出券を差し出し、バーコードを読みとってもらおう。と、どうしたことか、司書さんが急に顔を曇らせるではないか。

「失効、しちゃってますね。これ」

啞然とした。そもそも有効期限があったのか。確かに「しらはゆうか」の貸出券は小さいころに使ったきり、財布のなかで長年眠っていたのだから、そりゃ失効して当然だ。

やっぱり、来てよかった。

それならと再発行の書類手続きを受けて、「白羽佑果」と直筆した、真新しい貸出券を本と一緒にもらって帰った。今度はこれを持って、自分が読みたい本を探しに行こうっと。いまの私になら、きっとそれができるから。

高校生部門

優秀賞

兵庫県立加古川東高等学校 二年

家族の歴史

藤原 あかり

「いいなあ。」テレビを見て今年も言ってしまった。帰省だ。夏休みにニユースのインタビューで「〇〇県に帰ります。」と答える人を見ると、それに憧れている自分がいるというのも両親の実家はそれぞれ私が住む市内にあり、祖父母含め親戚とは頻繁に会えるからだ。つまり我が家にお盆の特別感はあまりないのである。

今年のお盆も父方の祖父母の家に私と両親、祖父母、叔父、叔母夫婦、従妹の計九人が集まった。この祖父母の家は自宅から徒歩一〜二分の所にある。今回食べたのはすき焼き。近所のスーパーで買ったいつもよりいい牛肉に、豆腐、山盛りの白菜、ねぎ、お麩、糸こんにゃく、きのこなどが入っただけでおいしかった。祖母の味はホツとするし、何よりみんなで鍋を囲むと自然と笑顔になる。食べながら小学一年生の従妹の話や私の部活の話、近所での出来事、甲子園の話題：挙げればきりがないほどいろいろな話をした。笑い声が飛び交ったり、初耳のことを知れたりする時間で、私はこれが大好きだ。

満腹になってひと息ついていた時、急に父が

「古いアルバムって残つとるん。」

と祖母に聞いた。納屋にあるかもしれないということ待っていると、大量のアルバムが持つてこられた。どれも埃をかぶり、色褪せ、ページをめくるとカビのにおいが漂う。越えてきた年月を五感で感じ、ワクワクした。

一冊目。表紙を開くと愛くるしい赤ちゃんの写真があった。思わずかわいいと言ってしまったが、その赤ちゃんは私の父だった。よく見ると面影はあるがすぐには信じられなかった。ページを進めると、幼い父を抱く若かりし祖母やスーツをビシッと着こなす若い祖父が写った写真も現れた。これを見て初めて、若い祖父と今の父、若い祖母と叔母が本当にそっくりだと知った。瓜二つという印象はなかつたので驚いた。

もうどれほど見たのかわからなくなってきた時、何冊もあるなかで特に古そうなものを手に取った。

「これ誰のやつなん。」
と聞くと

「わたいのや。自分で大人になってから作ったんやで。」

と祖母が笑って答えた。写真の中の小さい女の子はザ・昭和な格好をしていた。きつちりと毛先が揃ったおかつぱで、アニメなどでよく見る髪型だ。祖母の高校の卒業アルバムも

見た。当たり前だが、祖母にも今の私と同じように青春があったんだなと思った。当時の話をちゃんと聞いてみたい。

小・中学校の卒業アルバムが出てきた時が一番盛り上がった。祖父も父も叔父も叔母も私も同じ学校に通い、従妹も今年から私たちと同じ小学校で学んでいる。写真には古い木造の校舎や当時は新しかった遊具があったり、逆に制服はほぼ変わっていないかったりして懐かしさと同時に新鮮さを感じた。木造の校舎がとても怖かったことや今の小学校の様子を教えてもらった。学校は時代に合わせて変化していることと伝統があることを実感した。年代ごとに学校生活について話すことはできても、同じ学校を軸に三世代で語り合うことはなかなかできない。私は恵まれている。

そして最も深く印象に残った写真は、私は会ったことのない高祖父母、曾祖父母にあたる人が写っているものだ。まさか五十年以上経って玄孫に見られるとは思わなかっただろう。私も写真越しでもひいひいおじいちゃんやひいひいおばあちゃんに会えるとは夢にも思わなかった。藤原家は少なくとも百年前から同じ土地に住み続けており、昔は畑を耕す為の牛を飼っていたという納屋や大きな母屋も背景として写真に残っていた。六年前に建て替えるまで私にとつての「おばあちゃん家」であり、慣れ親んだ場所なので、知っているはずなのに、人が違うだけで初めましての場所に思えた。不思議な気分だった。いつも

仏壇やお墓で手を合わせる「ご先祖さま」と私が繋がったような気がした。

また、この日は終戦の日。「この人たちが戦中・戦後を生き抜いてくれたから今の私があるんやな」と思い、初めて歴史を自分や家族に繋がっているものとして捉えられた。もしもほんの少し歯車が違っていたら「いま」は全く別のものになっていたかもしれない。家族全員に感謝したいと思う。

私は帰省を羨ましいと思っていたが、あの日、藤原家の歴史を垣間見たことで、同じ土地で生きているからこそわかったこともあると知り、今では誇りに思っている。現代は写真も動画もパッと撮影できて簡単に残せる。しかし、色やにおい、手触り、手書きのメモなど本当に味わい深いものが残せない。だから面倒だけれど、写真をアルバムに残そうと思う。未来で思い出を語る日まで。

高校生部門

佳作

東京都 NHK学園高等学校 二年

あの日と目が合った

前田 乃愛

祖父母が引越すことになった。それに伴って置いていた荷物を引き取りに行くことを理由に私は祖父母の家を訪ねた。随分前から玄関先に住みついているやもりとも、もうすぐお別れをしなければならぬ。たくさんのお別れが待っている事をドアを開けて初めて実感する。靴箱に入っているもう履けなくなってしまう小さなサンダル。いつからか使わなくなった道路に描けるチョーク。飛び降りチャレンジをして怒られた階段。いつもより時間をかけて歩く。全て持つていく事はできない。もう長く意識すらしていなかったのにお別れの時になると悲しくなるのは何故だろう。オレンジ色の暖かい照明の下、低い位置にある本棚や引き出しと久しぶりに目が合った。お気に入りだった絵本。譲り受けたは良いものの、結末が怖くて二度と読まないと決めた絵本。初めて買った文庫本。視線を向けただけでも過去の小さな日常たちが顔を出す。忘れていた日々が鮮明によりみがり、懐かしさと溶け合って溢れかえった。優しい色で身体中が満たされたかのように暖かくて優しく、私はしばらく何もせず優しい色に身を委ね、思い出に浸っていた。西向きの窓から光が差しはじめている。私は本棚を空にするべく本を一冊ずつ取り出し始め

た。時折、誘惑に負けてページをめくる自分に苦笑する。心地良い空気を壊したくなくて大袈裟な程、丁寧隅々まで意識を巡らせる。自ずと作業のスピードは落ちていった。取り出す本が絵本から文庫本に切り替わってから少しして、私は小さな紙を一枚発見した。不恰な人が描かれた紙であった。見覚えのあるその紙に私は思わず笑みをこぼした。紙の正体は、九歳のころに描いた自画像だった。当時、私は十歳になることが嫌で仕方がなかった。十歳になってしまえば九歳の頃の楽しかったことたちがいなくなってしまうと思っただけである。別に年が変わったところで何か特別な何かがあるわけではない。でも、当時の私にとって年が二桁になるといふ事はきつと明らかに何かが変わると思っていた。どうにかして九歳までの楽しい日々をなんらかの形で閉じ込めておきたくて必死に導き出した答えが自画像だった。今の自分を紙に描いていつでも楽しかった日々に戻ってこれるようにしたかったのだ。自画像を描く傍ら、視線の端に映った空の青に温度を感じられず、心が寒くて仕方がなかった事をやけに鮮明に覚えている。あの日の私は自画像を片手に懐かしいと笑っている今の私を見て何を思うのだろう。やっぱりダメだったと悲しそうに言うのだろうか。きっと彼女は楽しかったあの時を過去の思い出にすくなくったのだろうか。人は変わらなずにはいられない。私たちは日々、たくさんのことを学ぶ。知識を得て考え方を知って。時が経つにつれて感情も変化していく。もうあの時と同じ本を読む

でも同じ場所に行ってもあの時と同じ気持ちにはなれない。だからきつと私たちはタイムマシーンがあっても過去には戻れない。結局、私たちは今を生きる事しかできないのだ。九歳のあの日の悲しみの本質が、今になって少しだけわかったような気がした。今はうまくまとまらない気持ちたちも数年後の私なら真っ直ぐ梳かすことができるのだろうか。いちばん大好きな本の中に出て来る詩が思い浮かんだ。常々、歳はとりたくないと思っていけるけれど、とればとつたで案外悪くないのかもしれない。今溢れている感情の本質を知ってみたいと思うのもまた事実であった。変化というのは未知数だから、怖いという感情が先に立つが、今立っているところから過去を振り返ってみれば悪いことなんてなかった。時が経つというのも悪いことばかりではないらしい。あくまでも十七年この世界で過ごしてみた感想だが。この気持ちはどんなふうに変わるのだろうか。そう考えると少し明日が楽しみな気がしなくもない。生意気な十七歳を笑う未来があればいいなど、柄にもなく考えている私が、温度が下がりつつある部屋に立っている。空に残っていた太陽の置き手紙がもうほとんど消えている。心の中は暖かいままだった。

一般部門

最優秀賞

群馬県 前橋市

味噌蔵の魔法使い

高山 恵利子（パート）

私は山里の小さな村で育った。転校生が来ることもない。道で会う人は見知った顔ばかり。特別な事が何一つ起こらない村は退屈だった。なかでも寡黙な祖母は退屈の見本ともいえる存在だった。大声で笑うことも、人とおしゃべりをするともない。いつも代わり映えのしない地味なモンペに、汚れの目立たぬ濃い色の割烹着をかけていたから、毎日の服装さえ同じに見えた。しかも頭には手拭いを目深に被っていたので、顔も容易には思い出せない。私が覚えているのは、祖母が被っていた手拭いに刻まれた万屋よろずの屋号だけだ。黙々と働くだけの祖母は、何を楽しみにしているのだろうかと思うとやるせなかつた。

貧しい農家に生まれた祖母は、無愛想で粗野な言葉遣いの人だった。雨が降り出すと「雨がとつとつ降ってきた」と呟いた。孫たちは「おばあちゃん数えたんかい？」と嘸はやし立てた。肌寒い日に猫が体に顔を埋めていると、「猫の天気病みだ」と言い放つた。「寒さが苦手な猫は、雪の日には塞ふさぎ込むのだよ」と説明することもなかつた。人が来ても男のような大声で「寄ってとくれ」と叫ぶのが常だった。家業の蚕を私が怖がっても、世間の大

人のように「お蚕さんのお蔭で生活できる」と、たしなめるでもない。私は退屈で無愛想な祖母のような人間にならないために、早くこの村から出ていきたいと思っていた。

ある日私が学校から帰ると祖母の姿がなかった。「おばあちゃあーん」とおやつ欲しさに祖母を探しまわった私は、味噌蔵の戸が開いていることに気付いた。土蔵の壁にへばりつくようにして付け足された味噌蔵は、光の差し込まぬ恐ろしいな場所で、普段の私は近づくとさえない。いつにない私の呼びかけに何かと案じたのか、祖母が入り口に立ち戻り、私を手招きしている。ならばと意を決し、私は味噌蔵に足を踏み入れた。途端に目の前は漆黒の闇に変わり、干からびた味噌の香りに包まれた。ようやく暗闇に慣れた目で祖母のいる奥の大樽まで歩み寄り、つま先立ちで中をのぞき込むと、大樽の中はさらなる宇宙のような闇が広がっていた。大樽の淵につかまって目をこらせば、手が届くあたりに味噌の上に敷きつめられた平べったい小石が見える。祖母は被った手拭いを後ろに引き、割烹着の腕をまくりあげ、小石を十個ほどつけた。するとそれまでとはうって変わり、蔵は瑞々しい味噌の香りに包まれた。差し込む光まで染めゆくような、強烈で濃厚な生きている味噌の香り。解き放たれユラユラと広がりゆく香りの先端までもが見えるようだった。上半身を樽の中に折り曲げた祖母は、石のへこみをなぞるようにしゃもじを動かし、真っ黒な何かを引きずり出した。その先端を左手でつまみ、菜箸さいばしで味噌をしごき落すと、鼈べつ

甲色こういろに輝く大根の味噌漬けが姿を現した。

驚いたことに味噌漬けを持つ祖母は微笑んでいた。黄ばんだ歯の色さえ祖母を別人のように生き生きして見せた。祖母は愛しげに鼈甲色の大根を光へかざしてから鉢に入れた。また一つ鼈甲色のキュウリが加わると、再び祖母は歯を見せた。樽の底に沈んでいた大根は祖母の代弁者。寡黙な祖母に代わり強烈な香りで「うんまげだんべえ」と言っているようだった。祖母は山盛りの鉢を私に預けると、味噌の表面を平らにならして小石を戻し始めた。石畳のように敷きつめられた小石に守られ、味噌樽は再び深い眠りについた。祖母もまたいつも通り頭の手拭いを目深に直した。

まだ覚めぬ夢をみているかのように呆然としている私に、何か尋ねるでもない。祖母は顎を出口の方へしゃくって、蔵の外へ出るよう指示した。そして引き戸に手をかけ華奢きゃしゃな体を傾け、自分の体重を利用して分厚い引き戸をゆっくり締め始めた。ゴロゴロと転がる戸車の音が止んでも、祖母は私を振り返るでもない。私の存在を忘れたかのように、母屋までの細い道を歩き始めた。

退屈な村で退屈な祖母が引き起こした魔法。退屈な時間が生み出すエネルギーを自在に操る祖母は、退屈どころか未知なる力を使いこなす時空の達人だった。

味噌蔵を出て辺りを見渡せば、退屈と思えた村が輝いて見える。沢蟹がいる小川が、オ

オバコの生えた畦道^{あぜ}が、前山から上る炭焼きの煙が、味噌蔵で眠っていた大根と同じ激しさで私に訴える。「密やかに日々変化する者の姿は、見ようとしなければ見えない。言葉を持たぬ者たちの声は、聞こうとしなければ聞こえない」と。私には今初めて、密やかに変化する村の真の姿が見え、無口な祖母の真の声が聞こえた。この村に居たいと思った。

味噌蔵の入り口に咲く大てまりの花が、ポンポンと張り出して行く手をふさぐ。前かがみで花の下をかいくぐって行く祖母と、味噌漬けの鉢を抱え、花の間を縫うようにして追う私。腰を曲げモンペに風をはらませ、がに股で歩く祖母が魔法使いのように見えた。

一般部門

優秀賞

北海道 旭川市

「あのね」

柴田 えみ子（外部調査員）

「あのね」

末期癌でもう幾ばくも無い母が私に言う。

「もうぼちぼち身内を呼んでもいい頃じゃなかと？」

私は母の言葉に目を丸くし、思わず言った。

「えっ！それって本人が言う言葉なの？」

「ありゃ、それもそうか」

80歳で癌と分かった時から母の意外な一面を知ることになった。明治生まれの夫に比べ優しい性格だが、そっかしくノ一気な人だった。それが、自ら望んで癌の告知を受けた。何の病気が分からないで生きるのも死ぬのも嫌だというのが理由だった。それは分かるがと私は複雑な気持ちだった。それなのに母の次の言葉にはさらに驚かされた。

「あのね、入院も治療もしないと決めたとよ」

なぬ〜！入院も治療もしないだと！あり得ないだろう！と心の中で叫ぶ私。しかし母は

「死に急ぐ訳じゃなか。家で最期までにゃんこと遊んだりお花を眺めたりしたいとよ」

医者から家族に母の命は持つて3カ月から6カ月と言われていた。

「あのね」う、うん。今度は何？

「大体ね、病院に居たら病人になってしまっけんね」

「はぁ！お母さん、立派な病人だけど」

「バカばい。ベッドに寝た切りじゃ、引っ越しの準備もできなからうが」

「へっ！なんで引っ越し！」

「お父さん（2年前に他界した夫）がちゃんと片付けて来んしゃいと言うに違いなか」

母の言う引っ越しとはあの世に行く事だったのだ。平気で死について話す母に、私は戸惑いを隠せなかった。しかし、母は以前から終末期の延命治療はしないと決めていたのだ。母の意志は明解で話す言葉にも妙に説得力があった。死をあの世への引っ越しとは！思わず膝を叩いた。父を尊敬していた母。その父に会えると希望さえ持っていた。母は身辺整理を始め、卓球仲間に出たりピアノを弾いたり、猫と遊んでいた。どれも入院をしていたら叶わない事だったと思う。少しずつできることが少なくなり終日ベッドにいるようになった頃、私にかけたのが冒頭の言葉だ。そして臨終になってから身内を呼んでもつまら

ないといった。数日後、きょうだい全員が母のベッドの周りに集まった。母は8人きょうだいの長女だ。昔話に花が咲き、母は満面の笑みを浮かべて心から楽しそうだった。女学校時代コーラスをやっていた母は好きな歌を吹き込んだカセットテープを枕元において聴いていた。ある日、目をつぶって聴いている姿に不安を覚え、顔を近づけたところふいに目を開け「まだ生きとるばい」とにやりと笑った。食事がとれなくなっても「順調に死にかけている証拠。木が枯れるように死ぬのが一番じゃけんね」なんていう。後に医者の方が、末期の延命治療は苦しむことが多いこと。母が痛みを訴えなかったのは、末期治療を施さなかったためと断言した。母は決してノー天気なんかじゃなかったのだ。むしろ自分の死ときちんと対峙していた。私は母のお陰で死を考えることは生を考える事だと実感した。ある日、寝たままの母が言った。

「あのね。最後にピアノを弾きたいけん、支えてくれると？」

ピアノの前に座る母の体を私は後ろから支えた。母は自分が暗譜した曲を全部弾くという。

「無理じゃん」と私。

「バカばい。やってみんなことには分からんと」

「荒城の月」「赤とんぼ」「朧月夜」「七つの子」…。次々に譜面なしで弾き、ついに最後

まで来た。ラストは「月の砂漠」だった。

「お父さんも大好きだったけんね」といい、小さく歌いながら弾く母。支える私の腕に涙がボロボロ落ちた。母の最期の「あのね」は亡くなる少し前だった。

「あのね、お前は忘れん坊じゃけん、私が死んでも命日を忘れるんじゃないかと？」

「いやいや、それはいくらなんでも大丈夫」と応える私。しかし、よほど心配だったのか、母は私の結婚記念日に亡くなり、私の誕生日にお葬式をあげた。白い梨の花が満開だったその日、

「あのね、忘れようがなかでしょ」

といたずらっ子のように笑う母の声が聞こえたような気がした。

一般部門

佳作

外国のノート

兵庫県 淡路市

鍋島 えり（日本語教師）

外国のノートが好きだった。紙芝居のような厚い表紙の、オブラートみたいに薄い紙のノート。日本には一冊も売ってないノート。

私が最後に外国で買ったノートの表紙には、色取りのいい油絵のようなチューリップが揺れていた。何度もページをめくっては薄紙が指に触れる感触を楽しんだ。

あるとき悪酒に浸りながらこのノートに書き留めておいたらしい。もし明日死んだら何を後悔するんだろうかと。

「生きていると感じられることを見つけられなかったこと」

二日酔いの朝。テーブルの上にノートが開いたままだった。そこに書かれた文字が差し込む朝日に透けていた。

その頃の私は東京で勤めていた。満員電車で溺れるように浅い息をして、雑踏の中で時々胸の鼓動を確認する。掃いて捨てるほど溢れてくる人や、店や、品物。私にはどれもこれも同じに見えて、何もツヤツヤと光を放つものがなかった。仕事に住む所に点々と渡り歩

き、私は何度目かの引越して、チューリップのノートを失ったのである。あの薄い紙に後悔は滲んだままだった。

私がふたたび外国のノートに出会ったのは、日本語教師の職についた時であった。結婚し、夫の転勤で瀬戸内海の島へ引越してからのことである。

私の生徒は、ベトナム人技能実習生。ベトナムから日本へ出稼ぎに来ている若者たちだ。彼らのノートである。私が探していた外国の、日本には売ってないあのノート。

ベトナムのノートの表紙には、二頭身の女の子と男の子の絵や、意地の悪そうなネコの絵が描いてある。そしてやっぱり、紙は風が吹いたら破れそうなほど薄いのである。

技能実習生というのは信じられないほど勉強が嫌いだ。授業中はノートを机の奥へしまったまま、寝るか喋るかケータイをいじっている。テストをすればカンニングをし、責めればお互いを庇い合う。私は何度教室を飛び出そうとしたことか。

しかしそうしなかったのは、彼らの姿に光を見つけたからだだった。

実習生たちに教室外での活動をさせた時のことである。三十人を引き連れての海岸ゴミ拾い。彼らは教室では見せたことのない真剣な眼差しで、日本人が捨てたゴミを拾い続けていた。真夏の太陽が海を干上がらせるほど暑い日だった。それでも彼らの汗は喉元まで滴り光っていた。

彼らが会社へ配属されるまでの時間は一カ月。私はその短い期間で、彼らの拙い日本語能力を僅かでも上げなければならぬ。

まずは彼らをやる気にさせ、そして日本語を好きになってもらうため何ができるか考えた。私はこれまでの人生で培ったありとあらゆる引き出しを開けては閉め、少しでも彼らが授業に参加してくれるよう力を尽くした。

春はしだれ桜を見にゆき、夏には彼らの植えたトマトが食べごろになった。秋にかけて稲穂がこうべを垂れ、次第に瀬戸内海は凍える潮風を連れてくる。そのうちに、一人また一人と実習生は教室を巣立っていった。私は教室で工場長になり、現場監督になった。日本語での指示は通らず、思うように答えてもくれなかった。

あるとき私は、彼らに日記を書かせることにした。時間を与え、辞書を使わせれば、彼らの思いが少しはわかるかもしれないと考えていた。

「わたしは、うつくしいゆうひがみるとき、なみだをでます。かぞくにおぼえますから」
何も言葉が出ず、ただ涙の顔絵を描いた。

「もうすぐかいしゃへいきます。いくらたいへんでもがんばる」
赤ペンで、がんばれ！ と書いた。

「にほんごはむずかしですから、でもがんばります。せんせいのじゅぎょうだけ、わたし

のたのしことです」

ありがたいと、赤い花マルが踊った。

正しくない助詞。ひっくり返った平仮名。

何度も消しては書き直されて破れそうなノート。私でなければ読めないと思った。私でなければ、彼らの輝きを見つけれないと思った。胸がひとりでドキドキして、目頭が熱くなり、体中の毛が逆立った。

私は気付いていた。知らない国のノートが好きだった。日本にはない、あのいい加減な薄い紙が好きだった。なくしたお気に入りのチューリップのノート。でも私が探していたのは、ノートに書かれた文字だった。文字の中にある、人の生だった。

薄い紙の上に、力任せに書かれた不自然な文章を眺めていると、あんなに好きだった紙の感触を味わうのも忘れているのである。

令和4年度 第8回 藤原正彦エッセイコンクール 概 要

■ 審査員

藤原正彦 姫路文学館長（数学者・作家・お茶の水女子大学名誉教授）

プロフィール

昭和18年旧満州生まれ。新田次郎・藤原てい夫妻の次男。
東京大学理学部数学科卒業、同大学院修士課程修了。理学博士（東京大学）。
コロラド大学助教授、お茶の水女子大学理学部教授を歴任。
昭和53年『若き数学者のアメリカ』で日本エッセイスト・クラブ賞、平成22年『名著講義』で文藝春秋読者賞を受賞、平成26年『孤愁』でロドリゲス通事賞を受賞。
そのほか、『国家の品格』『本屋を守れ』『我が人生の応援歌（エール）』など著書多数。
平成26年4月、姫路文学館長に就任。近著に『日本人の真価』。

■ 作品規定

対象は中学生以上、テーマは自由、400字詰め原稿用紙5枚以内。
日本語で書かれた自作で、未発表のものに限る。令和4年9月15日締め切り。

■ 賞

「中学生部門」「高校生部門」「一般部門」ごとに〈最優秀賞〉〈優秀賞〉〈佳作〉各1編。
賞状、藤原正彦館長のサイン入り著書と副賞の賞金（中学生・高校生は図書カード）を贈呈。

■ 応募状況 … 応募総数 1,928点

部門別	応募数	兵庫県内			他府県	海外
		姫路市内	姫路市外	県合計		
中学生部門	162点	149	11	160	2	0
高校生部門	1,134点	602	521	1,123	11	0
一般部門	632点	42	107	149	483	0
合計	1,928点	793	639	1,432	496	0

中学生部門：市外では、兵庫県宝塚市、茨城県、東京都から応募があった。
学校応募（学校として作品をとりまとめた応募）は6校であった。
個人応募者は2人であった。

高校生部門：県外では、東京都、岐阜県、三重県、大阪府、福岡県、鹿児島県、沖縄県から応募があった。
学校応募（学校として作品をとりまとめた応募）は12校であった。
個人応募者は10人であった。

一般部門：20代から90代まで各世代から応募があり、そのうち60代以上が過半数を占めた。
北海道から沖縄県まで、全国から応募があった。

■ 表彰式

日時：令和5年1月22日（日）午後1時30分～3時

会場：姫路文学館 講堂（北館3階）

第8回 藤原正彦エッセイコンクール
入賞作品集

編集・発行 姫路文学館
〒670-0021 兵庫県姫路市山野井町84番地
TEL (079) 293-8228

令和5年(2023年)1月22日発行